

何故鷹が鷹を生むか

—「個々の生理的的心理的特徴傾向は遺傳されるけれども、全體としての人間の價値は遺傳されない」といふ、曾て何人からも指摘されたことのない一大事實を中心とする斷片的な考察—

一八六六年、有名な科學者でも何でもない一介の僧侶メンデルが、豌豆の遺傳に關する四十五頁ばかりの小論文を發表した時、科學者達の唯だ一人も、それに對して何等の注意を拂ふこともしなかつた。そして其儘二十世紀の初年に及んだ。とに角四十年近くを經過してからでも、あの偉大な遺傳法則の發見者メンデルの名が想ひ起され、あれほどの榮譽を歸せられるに至つたのは、寧ろ一つの立派な奇蹟であらねばならぬ。

メンデルの發見が、右の如き運命を通りぬけねばならなかつたのは、改めて云ふまでもなく、有名な科學者によつてなされたものでなくして、單に一介の僧侶によつてなされたものであつたからである。その上、餘りにも新しすぎ、餘りにも時代を超越してゐたからである。

今日の遺傳學は、殆んど其全部が、メンデル

法則の適用と間違ひだらけの適用とから成立してゐる。

メンデル法則の、間違ひだらけな適用を基礎として、その上に愚かしくも築き上げられたる似而非科學が所謂優生學である。

優生學は未だ人情を解するに至らない年少者の無邪氣さと快活さとを以て言ふ、『生れながらの不具者や、病弱者や、狂人や、犯罪者は劣等人である。そしてそれらの劣等人が同じく劣等人であらうところの子孫を残さないでゐない故、彼等をして絶対に子孫を残さしめないやうにすることは人類全體の爲めに必要である』と。

或る事に關して、一方の人間を低劣であるといひ、他方の人間を優秀であると云ふのは、極

めて穩當な事であり、隨つて私共の日常やつてゐるところの事である。

全體的に、人間として、一方を低劣と云ひ他方を優秀であると云ふのも、常識的な言葉として必ずしも許されぬことではない。

しかし乍ら、我々人間の日にまで、如何に立派さうに見える人でもが、神の前に、丁度正反對な物であり、我々人間の日にまで、如何につまらなさうに見える人でもが、神の前に、丁度正反對な物であり得ることを信する限り、神ならぬ人間の我々は、我々自身に對してのほか、そもそも何人に對して不敵なる演習的宣告を下し得るものぞ! 『彼等は生れざりしならば、幸ならん。汝等は生れざりしならば、幸ならん』と。

優生學者等からして『生れざりしならば、幸ならん』と刻印を打たれるところの先天的不具者、病弱者、狂人、犯罪者等は、勿論定型的人間であるよりも變質的の人間であると云はれ得るであらう。

だが、特に數千年の文化史をもつてゐる、最高生物としての人類界に於て、單に定型的人間であるといふことが、果してそれほど善い事であらうか。單に變質的であるといふことが、果して

それほど悪い事であらうか。

定型的でないのが、變質的であるのが、直に劣等人たることの條件をみたすものであるとしたら、恐らくは最も多くの割合に於て、定型的ならぬものを、變質的なものを有つてゐる人間種屬は、種屬としてまた最も劣等なものになるのではあるまいか。

優生學者等よ、もしも卿等の言ふ如く、單に生れながらの不具者が劣等人であるとしたり、揃保已一は劣等人であつたらうか。

單に病弱者であることが劣等人であるとしたり、正岡子規は劣等人であつたらうか。

單に狂人であることが、乃至精神異狀者であることが劣等人であるとしたり、ニイチエは、ドストイエフスキイは、マホメットとポオロとは劣等人であつたらうか。

單に犯罪者であることが劣等人であるとしたら、エルレヌヤワイルドなどは劣等人であつたらうか。序ながら不敵にも朝意を紊亂したり、社會の秩序を破壊したりしたといふので、殆んどこのべつに『別荘はひり』をさせられてゐる社會主義的犯罪者堺利彦氏、山川均氏等は、また犯罪者たるの故を以て劣等人と云はれるで

あらうか。

一方を優等人とし、他方を劣等人とすることが許されるにしても、優等人であるか劣等人であるかを決定するのは、個々の生理的、心理的傾向が定型的であるや否やでなく、變質的であるや否やでなす。寧ろ全體として人間として人格的存在として、倫理的に又審美的に、優秀であるかそれとも低劣であるかである。

へげ繪かきとそれに相應した友人のデイレタタント等とは、いつも仔細らしげに言ふ——あの色この線は、全く善い色、善い線である。殆んど、それらの色彩や線條を畫面の全體から切りはなして見ても、尙ほ且つ美であり、醜であり得るかのやうである。

似而非科學『優生學』の信者等は如何なる個々の生理的、心理的特徵傾向も、それ自身優等なものでも劣等なものでもあり得ないといふこと、それらの特徴傾向全體を結合し配列する上の仕方、於て、はじめてそれぞれの價値を、人間的價値を生ずるといふことを思はないのである。

どよりは普通の場合願はしいものではないだ

らうが、三宅雪嶺先生や、大杉榮君などに於ては、寧ろ一種の品位となり、もしくは魅力となつてゐるではないか。

亡くなつた大隈侯爵に於ても、あの片胸をなされたことが、本來の長廣舌を愈々長廣舌にし、本來の『世界的偉人』を愈々『世界的偉人』にして行つたのではなかつたらうか。

電光石火の早業が、手品師にあつては、身を拵ける藝となり、巾着切にあつては、身を滅ぼす本となる。

ドストイエフスキイにあつては癪癪が彼の藝術の最善なるものを産み出させることに役立つてゐる。けれども、汽車や電車、運轉手等に癪癪の發作があるといふのは、單に假定して見ただけでも我々は戰慄を禁じ得ないではないか。

ニュウトンはその二匹の愛犬をして自由に入せしめる爲め大小二つの孔を扉にあけた。大きな犬の爲めに大きな孔が必要である如く、小さな犬の爲めにも小さな孔が必要であると考へたのである。

彼はまた鶏卵を煮てゐるつもりで、懐中時計を鍋の中に入れてゐた。恐らくは其手に鶏卵を握りながら、懐中時計を見つめる如く見つめてゐたことであらう。

かくの如き心理的特徴傾向は、ニウutonなぞの場合に於て天才を證明するものとなり、普通の場合に於て低能を證明するものとなつてゐるではないか。

再び言ふ——これを劣等人と云ひ、かれを優等人と云ふやうなことが許されるにしたところで、その劣等人であるか優等人であるかを決定するのは個々の生理的・心理的特徴傾向に定型的なものがあるや否や、變質的なものがあるや否やでない。寧ろ、それらの特徴傾向を總括してゐる一全體として、人間として、人格的存在として倫理的乃至審美的に優秀であるか、それとも低劣であるかである。

ところで、似而非科學「優生學」の信者等は、個々の生理的・心理的特徴傾向に、定型的なもの、變質的なものがあることが、直に劣等人であると云ふ風に考へ、そして個々の特徴傾向がメンデル法則等に從つて遺傳される故、概して劣等人の子孫には、必ずどれだけの劣等

人が出て來るといふ風に考へる。換言すれば、人間としての價值、人格的價值、その物が遺傳されるものと考へるのである。

だが、讀者諸君よ、人間としての價值、人格的價值その物が果して遺傳されるであらうか。惡人の子孫の中のどれだけが、必ず「惡」その物を遺傳されるであらうか。醜婦の子孫の中のどれだけが必ず「醜」その物を遺傳されるであらうか。雌雄の鶯(劣等鳥としての)は、必ず鶯を生まねばならないであらうか。

また必ず萬でなければならぬものだけか、重ねて言ふ、人間としての價值、人格的價值その物が遺傳されるであらうか。

恐らく、大多數の諸君の健全な本能と、まよやかな感覺と、氣高く美しい感情とは、聲を揃へて力強く「否」を叫ぶであらう。

だが、諸君の中の何人の理智が會つて、「價值は決して遺傳されない」といふ此一大事實を明白に指摘してくれたであらうか。優生學の根本思想を何となく潰滅的に感じてゐる人々の如何に數多くあることぞ。それにも

かかはらず、これまで唯だの一人でもが、優生學を全然似而非科學的であり、非科學的であり、單に笑ふべき出鱈目にすぎないと云ふことを喝破したであらうか。ただの一人でもがそれをなしたであらうか。

餘りにも流れ過ぎるメンデルの法則などを細説したり、染色體論を中心とした當時流行の、けれども少からず疑しげな假定説の色々々を講釋したりすることは、今の場合控へて置かう。

ともあれ、平たく言つて受胎の際、両親の生理的及び心理的性質は、それぞれに先づ個々の微細なる遺傳因子に分解される。この事は今日大抵の遺傳學者等からも承認されてゐる。ただ私は、右の分解が彼等の考へてゐるよりもずつとずつとこまやかな、殆んど無限にこまやかなものであるかも知れないことを言つて置きたい。

さて第二には、右の如く分解された父方の遺傳因子と母方の遺傳因子とがすつかり混濁されてしまふ。

さて第三には、右の如く混濁された遺傳因子の中、同一傾向のものは相合してより力強い

ものとなり、反對傾向のものは相斥けて、より無力なものとなり、時には殆んど無きに等しいものとなるであらう。

さて第四には、右の如き變化を受けた遺傳因子が、父の性格ともちがひ母の性格ともちがつた、全然新しい一つの性格に、生理的及び心理的の性格に凝結してしまふ。

両親を同じくする場合、子供達の性格にふくまれてゐる遺傳因子は、皆同一である。ただ受胎の時を異にするところから、凝結の組合配列の仕方を異にし、従つて非常に異なる性格を造り上げるのである。時としてはあれでも兄弟かと思はれるほどのものを造り上げてしまふのである。

兄弟にして若し、遺傳因子の凝結工程をさへ同じくされてゐたならば、その生理的心理的の性格全部が全然同じものであつたらうといふことは、殆んど受胎時を同じくする雙生児が、肉體的にも精神的にも、殆んど區別の付かない位に似通つてゐるといふ、あの顯著なる事實を土臺にして十分に推定し得られるではないか。

毛がちちれてゐるとか、色が黒いとかが、鼻が

低いとか云ふやうなことが遺傳因子であるとしたら(頭の悪い遺傳學者等は往々にしてさう云ふ風に考へるのだが)、両親のどちらよりも毛がちちれてゐなかつたり、両親のどちらよりも色が黒くなかつたり、両親のどちらよりも鼻が低くなかつたりするのは不思議な、不合理な事であらう。

けれどもそれらの特色が、その儘遺傳因子になるのではなく、もつともつと微細な殆んど名狀しがたくこまやかな特色に分解されて、はじめ遺傳因子になるのだとしたら、子供が両親のどちらにも似ない髪の色や、肌色や、鼻などを持つてゐるとしても、別に不合理と考へるにも及ばないではないか。

髪の色や、肌色や、鼻の嗜好さへ、その儘には遺傳するものでない。それらの物の取合せが其儘に遺傳されないのは、尙ほ更なことである。

美しい美しくないのは、各々の部分によつて決定されるのでなく、全體の取合せによつて決定されるのであるとしたら、美人の子に美人が出來ないとしても、『美しい』といふ價值が遺傳されないとしても、それは寧ろ當然すぎるほど

の事ではないか。

道徳的に立派な人物であるとかないとかいふのも、その人格を構成する所の色々な部分によつて決定されるのでなく、全體の取合せ隨機によつて決定されるのであるとしたら、そして遺傳されるのが色々な部分にすぎないとしたら、個々の生理的及び心理的特徴傾向は遺傳されても、全體としての人間としての價值は、人格的價值は遺傳されないといふのに、聊かの不思議な事もないではないか。

取合せの上から、親にあつては寧ろ理直であつたところの高からぬ鼻が、子にあつては單に邪魔にならないのみならず、寧ろ積極的に其顔を魅力あるものにしてゐることさへある。價值は遺傳しないのである。

取合せの上から、親にあつては兎に角ない方がよいと思はれるそばかすが、子にあつては寧ろ美しさを加へるものとなつてゐる。價值は遺傳しないのである。

一事に執申すれば前後を忘却してしまふと

いふ性質が、親命をして金儲けの爲めに前後を忘却せしめ、息子をして藝者買ひの爲めに前後を忘却せしめるのは、極めてありがちな事である。

個々の特徴傾向は遺傳されても、全體としての價値は遺傳されないのである。

楠正成の子に正行があつても、そのまた正行の子に正儀があつても、「勤王の志」が遺傳されたのではない。

むしろ遺傳されるものやうに思はせたり、思つたりしたことが、強烈なる暗示となつて働いたことを考へねばならぬ。

更に、さまざまな感化や教育が、彼等を父の如き、祖父の如き勤王家に作り上げることにより、獻じてゐることを注意されなければならぬ。

泥棒の子が泥棒になり易いのも、盜癖その物が遺傳されるのではない。

泥棒の子だと言はれたり、思つたりすること、彼の道徳的自尊心を放棄させてしまひ、自制力をなくさせてしまふこと、盜癖が遺傳されるやうに思はせられたり、現に盜癖があるかも知れないとして警戒されたりする内に、悪い暗示が働いてつひに泥棒をさせてしまふといふやうなことを注意すべきである。

序ながら所謂盜癖は、盜癖を自制する意志力の不足の事である。動物的衝動としては總ての人々に盜癖があるのだ、大抵の人々はその思ひかきを抑へるに足るだけの意志力をもつてゐるのである。

總じて犯罪者の子孫に犯罪者が多く出でゐるとしても、それは頭の悪い優生學者の考へる如く、「犯罪性」が、より精しく云へば「強盜性」や、「虐殺性」や、「脅取財性」や、「無政府主義性」や、「不敬罪性」が遺傳されてゐるのでない。

餘程こまかな分類に於ても、父祖と似た似通つた種類の犯罪者になる場合——それでもやはり遺傳の結果であるより以上に、悪い暗示と感化と、並びに父祖同様の不幸なる生活條件の結果であるやうに思はれる。

六本指だとか、三口だとかいふやうなどんな大きな變質的傾向が遺傳される場合にも、尚ほ且つ人間としての價値、人格的價値その物が遺傳されてゐるのでない。

なぜと云つて、親に於て其人間の價値を低め

の方に役立つてゐた同じ不具性が、子に於ては其人間の價値を高める方に役立つといふのは極めてあり得べき事なのだから。

例へばバイロンの悪い脚が遺傳的なもので、そしてそれが彼を偉大ならしめる上に、非常に役立つてゐたかも知れないことを考へて見るがよい。

人間の人格的價値その物が遺傳し得ないとしたら、劣等人の子孫の中に必ず劣等人があるといふ優生學及び優生學的思想は、何といふ非科學的な、何といふ笑ふべき出目であるかよ。

定型的事であることが、種屬保存に好都合であるとしてもよい。變質的傾向をもつた人間の増加が人類といふ種屬を保存する上によくないとしてもよい。

人類は愚かなる自然科學者がお芽出度く輕斷してゐる如く、人類といふ種屬を保存する爲めに存在してゐるのではない。人類は個々としても、全體としても、今少しの意味のある、今少し嚴肅な、今少し高貴なる目的の爲めに存在してゐる。そして其本當の目的を達する爲めにこそ、種

屬を保存して行くことの必要もあるのである。だから、其本當の目的を達してしまつた時——それはいつの事だか知らないが——人類はもはや一刻をも残存することを要しないのである。

優生學者及びその信者等の如き、單に著しい變質の傾向を有しない（これも實際は怪しいが）だけの定型人、或は凡庸人共が、一切の非凡人を斥けて、彼等のみ永久にこの地球の表面を這ひ廻つてゐたところで、それに何の意味があるだらう。

寧ろ釋迦牟尼や、ナザレの耶穌や、アツシンのフランシスや、ダンテや、シェキスピヤや、ミケランジェロや、ベントオフェンや、ニイチエのやうな非凡人が、一萬人ほどでも、千人ほどでも、いや單に百人ほどでも今一度生れて来て、そしてそれらの人々が死ぬると共に、人類全部が地上から消え失せてしまつた方が、おお其方がどれだけ慶ばしいことであらうか。

人類はその最終最高の目的を實現する爲めに必要であるならば、斷乎として種屬保存といふが如き第二次的、第三次的目的を犠牲にすべきである。

人類を單なる獸としてののみ見るところの、愚

かしく、僭越な、瀆冒的な優生學者及び其信者等が何を知つてゐる。

鈴辨殺しの山田憲君を、世俗の評價してゐる如く、『大惡』人であるとする。尙ほ且つ山田憲君の子孫の中に、必ず『大惡』人が出るだらうといふのは、何等の理由なき推定である。なぜと云つて、憲君の個々の變質的特徵傾向は遺傳されるであらうが、『大惡』その物は決して遺傳されるものではないからである。

人間の魂の前に跪くことを知つてゐる信心深き讀者諸君よ、諸君は今涙と憤激とを以て、世にも薄倖なる山田憲君の遺兒、及びそれを取りまく一家一門の人々を想ひ出してくれたまへ、

謬れる遺傳觀念と、用餘日な似而非科學優生學との爲めに謂はれなく迫害されながら、尙ほ且つそれを理由あるものにさへ思はせられてゐる、あの薄倖さは眞に言語を絶してゐるではないか。

人間としての價値、人格的價値その物の決して遺傳されることが明白になつた時、低劣な人物を肉親の中にもつてゐる人々が、如何に救

はれたやうに感ずることぞ。

「價値は遺傳されない」といふ私の格言が一般に承認された時、劣等人を祖先にもつた人々もはじめて自尊心を取り返すことが出来よう。従つて、道徳も、宗教も、魂を取扱ふ一切のものが、はじめて久々に其失はれたる權威を回復することが出来るであらう。

個々の生理的特色傾向に人間の人格的價値があるのでなく、寧ろそれらの特色傾向全體の取合せによつて優等人が出来上つたり、劣等人が出来上つたりするものであるとしたら、そしてそれらの特色傾向の或る物を助長させたり、他の物を萎縮させたりすることが可能であるとしたら、悪い教育や訓練によつて非常に低劣な人間になつたであらう人々が、善き教育や訓練によつて非常に優秀な人間になつたであらうことは、たやすく想見出来るではないか。

これから出發して、私は山の芋が何故鱈になるかを説明し得られることを信ずる。

巧妙なる修正者は、ほんの一句か一字増減することによつて一篇のへば文章をまるで似て

もつかないやうな名文章に改めてしまふ。
『人間』といふ樹木に手入れをする天才的な植木屋「教育家」は、生理的にも心理的にもほんの一寸した鉄の入れ方で、野育ちのとまるで別物のやうな、立派な「人間」を造り上げて見せるのである。

廣義に云つて環境が、如何に個々の生理的心理的特色傾向に影響し、そして其結果人間としての價值、人格的價值その物に著しい影響を及ぼすものであるかといふこと、これについて細説精論するのは他日の機會に譲ることとする。

(一九二四年六月)

◆ (一)

釋迦牟尼の如き人も、矢張り人間である限りに於て、普通の尋常の、凡庸人等と共通するところのものを一面にもつてゐた。

南方所傳の緒經に依れば、菩提樹下の瞑想生活に於て、既に屢々リロマス、神經痛の如きものに苦んでゐられる。
後年阿難が常侍の弟子に撰ばれた頃には、世

尊の健康はだいぶ衰へてゐたらしく、寧ろ非常に病弱な體になつてゐられたらしく、想像される。

殊に入滅時に近くなつてからは、病苦の殆んど忍び難きを覺えられること希ならず、甚だしきに至つては、その昔成道の直後に現れて世尊を誘惑しようとした同じ惡魔が、またもや現れて世尊を誘惑しようとしてゐる。

惡魔は曾て言つた――
『世尊よ、世尊の教は餘りにも限りなく高く、限りなく深い。爲めに世上の何者もこれを理解し得ないであらう。されば寧ろ、無益の教を説くことを思ひあきらめて、獨り靜かに涅槃にはひられるがよいでせう』と。

その同じ惡魔が今また言ふ――
『世尊よ、世尊はもはや其弟子等について御心を煩はしたまふに及ばない。彼等は今や十二分に世尊の教を學び、さとり、行つてゐる。されば寧ろ、この上無益に病苦と戦ふことを思ひあきらめて心靜かに涅槃にはひられるがよいでせう』と。

偕て最後には、鍛治の子純陀の供養した菌料理の申毒から、尊烈なる腹痛、下痢、發熱等を來しつつに沙羅雙樹の間に臥して復び起

たず、諸行無常の理を示したまうたのである。かくの如く、折々の病氣にもかかつたり、その病苦をも訴へたり、甚だしきに至つては、餘りにも堪へ難き病苦と戦ふより、寧ろ安易なる永久の昏りに急ぎたいと願つたり、食べた物の毒にあたつて思ひもかけぬ旅のそらに、寂しい命終の時を迎へたりした點に於て、釋迦牟尼ほどの人も、矢張り普通の、尋常の、凡庸人等と全然共通したところのものをもつてゐた。

凡庸人等は釋迦牟尼ほどの人にも、さうした一面のあつたことを聞く時、たやすくそれを信じ、また釋迦牟尼に親しみを感ずることが出来ると言ふ。

そして凡庸人等は釋迦牟尼が他の一面に於て如何に凡庸人等と共通しない、ところのもの、全然別種のものを持つてゐたかと思はず、信じないものである。如何に彼等が釋迦牟尼を仰いで見なければならなかつたか、如何に彼等が釋迦牟尼の前に頭を低ればならなかつたかを知らず、知らうともしないのである。しかし乍ら、人間であるといふことは、單に凡庸人であるといふだけのことではない。